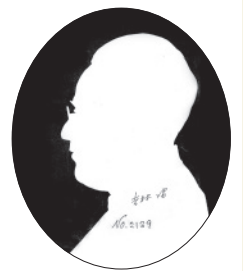


万年筆の旅



吉村昭
記念文学館

準備室ニュース

vol.7

平成28年11月15日発行
登録番号(28)0059号
編集・発行／荒川区
問合せ／
荒川区地域文化スポーツ部
複合施設準備室
〒116-8502
東京都荒川区荒川2-11-1
TEL.03-3802-4976

題字／津村節子氏
切絵／山崎達郎氏

「ゆいの森あらかわ」の開館日決定

吉村昭記念文学館、中央図書館、ゆいの森子どもひろばが一体となった施設「ゆいの森あらかわ」の開館日が、平成29年3月26日(日)に決定しました。



「ゆいの森あらかわ」の外観

「知恵と知識が集まる緑豊かな丘」を外観コンセプトとする「ゆいの森あらかわ」は、乳幼児から高齢者まで利用できる、これまでにない新しい発想の魅力ある施設です。利用者が自ら学び体験し、人と人が交流できる地域の

文化やコミュニティの拠点づくりを目指します。

「吉村昭の部屋 休止及び「吉村昭コーナー」のお知らせ

荒川ふるさと文化館(南千住図書館併設)の1階、郷土学習室に設置されている「吉村昭の部屋」は、平成28年12月18日をもって、休止となります。現在、「吉村昭の部屋」では、ミニ展示「吉村昭と冬の北海道―熊嵐くまあらしと「赤い人」」を開催しています。この機会にぜひご覧ください。

また、日暮里図書館の「吉村昭コーナー」では、平成29年1月31日まで、ミニ展示「資料からたどる吉村文学と災害―三陸海岸大津波」と「関東大震災」と題し、自然災害を題材に取材ノートや滞在メモ、著書などを展示しています。多くの皆さまのご来場をお待ちしています。

なお、これまで展示していた両施設の資料は吉村昭記念文学館に集約し、活用します。

吉村昭記念文学館友の会のお知らせ

吉村昭記念文学館の情報を広く発信するために設立した友の会では、会員を募集しています。

文学館が開館する3月までの期間は入会無料となっております。入会いただいた皆様には、会員証と会員バッジをお渡ししています。

また、賛助会員として寄附をいただいた方には、申込口数に応じて、ポストカードやブックカバーを贈呈しています。詳細につきましては、区ホームページをご覧ください。

(<http://www.city.arakawa.tokyo.jp/arapura/yuinomoriarakawa/tenj-event/tomonokai.html>)

吉村昭氏没後10年の動き

吉村氏が亡くなられてから、本年7月で10年が経ちました。今年に入ってから、『ひまわり海馬』が改版、『夜明けの雷』

鳴』が新装版として出版され、没後も吉村作品に注目が集まっており、ますます存在感が増しています。

また、今年の命日には、吉村氏と親交のあった多くの編集者が、氏の夫人で作家の津村節子氏とともに、墓参会を行い、生前の吉村氏を偲びました。



墓参会の様子

津村節子氏が文化功労者に選ばれました

津村節子氏が文化の向上発展に対して特に顕著な功績があったことが認められ、文化功労者に選ばれました。

11月4日には、都内ホテルで顕彰式が開かれました。

瀬戸内寂聴氏

ビデオレター

「吉村昭・津村節子を語る」

平成28年7月16日サンパール荒川大ホールで行われた、「ゆいの森あらかわ・吉村昭記念文学館開館プレイベント」において、作家瀬戸内寂聴氏から届いたビデオレターを放映しました。

瀬戸内氏は、吉村昭・津村節子夫妻と親交が深く、その出会いやお付き合いの様子に関しては、ご本人達それぞれのエッセイにも書かれています。

この度のビデオレターでは、お二人と同じ作家の瀬戸内氏だからこそ語ることができ、貴重なお話をご披露いただきます。本稿では、その一部を紹介いたします。



瀬戸内寂聴
吉村昭・津村節子を語る

作家瀬戸内寂聴氏が、京都嵐山「寂庵」から、ビデオレターを送っていただきました

同人雑誌「文学者」と「Z」

「文学者」、丹羽文雄さん※1がなさった。その「文学者」の同人会で始めて吉村さん夫妻にお会いした。夫婦で来るというのは、あの二人だけしかいなかった。

吉村さんと津村さんは、学習院で一緒にやってらしたのね。両方とも美しい方だったから、目立ちましたよ。でも出しやばる人じゃない。二人とも、おとなしくしてるんだけどね、やっぱり輝いていましたよ。【写真】

当時はあんまり仲良くならなかった。だって、二人がペタペタとしてるから、もう傍へ寄れないですよ(笑)

最初、小説はちつとも載らなかった。河野多恵子さん※2と仲良くなったけど、河野さんのも載らなかった。大阪から上京前に、河野さんは載ったことを私は最近まで知らなかった。津村さんもその頃はまだ載らなかった。

吉村さんのはね、載らなかったけれども、もう既に、非常に優秀な未来のある作家の卵だって言う風に紹介されました。とても詩的な、非常にいい文章を書いてました。私、好きでした。「文学者」の休刊は突然で、晴天の霹靂でね。やっと私も河野さんも、一つ二つ載せてもらうようになった時で

したからね。それはもうショックでした。ね。

そして小田仁二郎※3が、もう自分たちでやるしかない、と言って同人雑誌「Z」を立ち上げて、小田さんが人を選んだんです。

「文学者」の中からね。将来ものになるのはね、これとこれとこれだと選んだ中に、吉村さん夫妻がまず入った。それで声掛けたら、喜んで入ってきたんですよ。

当時の吉村夫妻

津村さんは、とっても優しい人だからね、仲良くなって、うちへ一度行っただことがあるんです。ちいちゃなマンションでね。一間ね、もちろん。赤ん坊が、司ちゃん(吉村夫妻の長男)が、生まれて間もない頃。小さい部屋にダブルベッドがあるから、もう隙間なんかないのね。そこで、司ちゃんが寝かされていたのね。その横で、津村さん

がちよつと待ってて、と言って・・・部屋の隅に形ばりの台所があるんです。だから全部丸見えなの。

私がダブルベッドの上で司ちゃんをあやしてる間に、津村さんがたちまちハンバーグステーキを、もうあつという間に作ってくれたんです。本当にそれが手際が良くてね、美味しいの。私はね、感心して、「あなたこんな事も出来るのね。大体小説家というのは掃除も下手で、料理が下手なのに。もうただの奥さんになってもいいのに、もつたいないね」なんて言ったこと覚えてるんですよ(笑)

その時もね、非常に暖かく、細々気をつかってもてなしてくださいました。学習院なんか出ているから、二人ともお金持ちだとばかり思っていたのね。同人雑誌「Z」をしたとき、やっぱり夫婦だからね、普通の一人の倍お金がかかる。でも、そんなことで困っているなんて思いもしなかったの。二人ともいつも身ぎれいにしているしね。

ケチじゃないし。そうしたらついでに辛かったって言われてね、びっくりしたんですよ。



津村節子氏蔵
【写真】
昭和28年11月結婚式での
吉村昭・津村節子
上野精養軒で挙式した

人ともいつも身ぎれいにしているしね。ケチじゃないし。そうしたらついでに辛かったって言われてね、びっくりしたんですよ。

瀬戸内氏の文学への情熱

文学で身を立たいというのは、純文学なんです。だからだれも純文学を書いて、すぐにお金が入るなんて、思ってたかったの。みんなそれは初めから覚悟してましたね。

やさしい編集者が、私に教師になりなさいってね。文学に才能がないとは言わないけれど、文学でやっていくのは大変だから、先生の仕事をしながら片手間に書けと言ったんです。そして、とても良い女学校の先生の仕事をとつてきてくださった。たしかに言われる通りだと思って、一応行くつもりでいたんです。

でも一晩考えて、私ね、先生嫌いじゃないんですよ。だからもしかしてこれをやったら、もう教師の仕事に熱中すると思っただんです。そうしたら、やっぱり文学は出来ないと考えた。私は教師になろうと思って家を出たわけじゃないからね。文学だと思って。翌日、とっても言いにくかったけどその人に、やっぱり先生やめます、と言った。

津村節子氏「玩具」で第53回芥川賞を受賞

吉村さんも4度芥川賞候補に選ばれていたの、津村さんの受賞、それは

やっぱり、吉村さんは辛かったと思いますね。

だけど吉村さんは男らしいから、そういうのはちっとも見せないで、津村さんがとつたことをね、喜んであげたけれど。

『戦艦武蔵』がベストセラー

吉村さんが「戦艦武蔵」を書いていることは、知らなかったです。いや、もうびつくりしましたよ。いきなりですからね。でもね、やっぱりね上手いです。斎藤十一さんっていうね、「新潮」の編集長が居りましてね。その人は純文学の才能のある人に、大衆小説の方を書かせて、転ばせるのね。それが趣味だったの。

五味康祐※4、柴田錬三郎※5、それから小田仁二郎。みんな転ばされた。その中に吉村さんも入ってた。私も



当時を思い出して微笑む瀬戸内さん

「女徳」で転ばされかけたけど、転ばされなかったの(笑)

けども吉村さんは、斎藤十一さんのお陰で、そうじゃない才能を引き出されたわけですね。

緻密な調査に基づいた戦史小説、歴史小説を発表

吉村さんは、あんなに調べに調べまくってすごいですよ。私どれを読んでもよく調べたと思う。その調べた、と言つのが表に出てないで、自然だね。一行のために、それこそたくさん調べてる。

それがなぜわかるかというと、私も伝記を書いたでしょう。それを書き出して、調べて書くと言つことがどんなに大変かと言つことがわかってきたから。どしどし捨てていかなければならない、調べたことをね。

調べたことの何分の一でしょうかねこれが大事というところだけしか書けない。

膨大な作品を残した吉村昭

作家は死んだらね、2年経ったら読まれないのが普通だけど、吉村さんはだんだんと年が経つほど売れてゆく。亡くなる時にね、吉村さんは自分が死んだ後、こんなに売れるとは思って

なかった。それでね、節子さんに、自分が死んだら税金が払えないから、この家売って税金を払って、お前たちはアパートに移りなさい、と遺言したのよ(笑)

本が売れ続けているのは、やっぱり吉村さんの作品が本当に面白いからですよ。いいからですよ。

普通、物語だったら、とんでもないことが書いてある。でもどこかでつじつまが合うことを、ちゃんと書いておかないといけない。

吉村さんののは、どの頁も理路整然としているからいいですよ。

吉村昭記念文学館開館にむけて

荒川区の自慢、それはもう吉村さんの文学ね、節子さんの文学ですよ。あの人は残ります。夫婦そろってあれだけの成果をあげたというのは、外に無いと思う。鴛鴦文学館にして欲しい。

荒川の若い子たちが、ああ、うちからこんな偉い人が出たんだと思うだけでも、すばらしいと思います。

《脚注》

- ※1 丹羽文雄 (明治37年～平成17年)
- ※2 河野多恵子 (大正15年～平成27年)
- ※3 小田仁二郎 (明治43年～昭和54年)
- ※4 五味康祐 (大正10年～昭和55年)
- ※5 柴田錬三郎 (大正6年～昭和53年)

◆開館ブレイベント

橋本五郎氏講演会 「吉村昭の取材力」

日時：平成 28 年 7 月 16 日(土)

14 時 30 分～16 時 30 分

場所：サンパール荒川 大ホール

挨拶：津村節子(作家・吉村氏夫人)

ビデオレター出演：瀬戸内寂聴(作家)

本年のブレイベントでは、読売新聞特別編集委員の橋本五郎氏を講師にお招きし、講演会を開催しました。

橋本氏は、秋田県出身で、慶應義塾大学卒業後、読売新聞社に入社されました。論説委員や政治部長、編集局次長を歴任された後、現在は特別編集委員として活躍されています。また、読売新聞読書委員として、吉村氏、津村氏の本の書評も行っています。

津村氏からは、「読売新聞社のベテランの編集記者からお話を聞けるのをとても楽しみにしてきました」とご挨拶がありました。

講演会では、多くの取材経験をお持ちの橋本氏ならではの視点から、貴重なお話をご披露していただきました。



講演を行う橋本氏

私の先生

残念ながら私は、吉村さんと直接お会いしたことは一度もありません。しかし、毎日のようにお会いしている感じがします。それは、私が一人のジャーナリストとして非常に尊敬をしているからです。なぜ尊敬しているか。吉村さんの文章は、飾らず、徹底して削いで、削いでという文章なんです。私は一つの彫刻のような作品だと思っています。新聞記者として、私の先生だとずっと思っております。

徹底して事実を書く

(吉村さんが言うには、戦史小説を書くことをやめたのは)「証言者の話によつて自分は小説を書いた。戦史の公式記録はそれを補強するために使用する

る方法をとってきた。あくまでも戦史(の公式記録)が先でなく、実際に経験した人の証言が先だと。ところが、だんだん証言者が亡くなっていく。だから自分は書かない」と、こうなるわけです。これだけ事実を描くことに徹底していました。

事実を見極めるための原則

多くの証言者に会う場合は、作り話や記憶違いにさらされます。そうすると、証言者の言っていることがどれだけ本当なのか、どうやって検証するか。吉村さんは、一つの事柄に少なくとも二人以上の証言者を入れて、それが正しく合致した時のみ採用することを常としていました。事実を見極めるために禁欲的であること、自らに課した原則を厳しく守ること、私はそのことも学びました。

『ポーツマスの旗』から得ること

この本からは、明治の指導者は何を考えていて、彼らにとって最も大切なものは何であったのかを考えさせられます。吉村さんは「明治国家の指導者はこういう人たちであった。自分を捨てて国を守ろうとしていた。そういう人たちがいたから今の私たちがある」とは、一言も書いてないけれど、手に取るようにそれを感じられます。事実の積み重ねによって、人に訴える力が

あると強く感じます。

事実をそのまま伝えることによつて、むしろ、すつと(相手に)伝わることもあります。そのような意味で、この本の中から様々なことをいただいたと思っております。

橋本五郎文庫について

七年前、私の通っていた秋田県の小学校が統合されました。統合により失われることがたくさんあるから私は反対していましたが、駄目でした。私は何とかしたいと思いました。私の母は、六十歳の時に老人の憩いの森をつくりました。私は自分なら何ができるのか、持っているものは本しかないから私の持つ本のうち二万冊の本を寄付して、図書館をつくらうと思いました。農家の主婦四十人がボランティアに手を挙げてくれ、図書の整理や掃除等自分たちで全てやりました。地元の人たちが自分たちでやることに意義があるとつくづく思いました。

吉村昭記念文学館開館に寄せて

今度吉村さんの文学館ができることを非常にうれしく思います。そこから今に生きる私たちが何を学ぶかが非常に大きいことだと思います。

この記念館が多くの人に、あそこに行ってみたいと思われる施設にしてほしいと心から思います。